

英語史における語順変化

- 古英語ではドイツ語と同様に、主節ではSVO、従属節ではSOVであった。
- これは従属節は熟慮度が高く、主節は強調などがかかりうることから、あせり度が高いことの反映と考えることができる。
- 現代英語では従属節もSVOになった。
- これは全体的に英語があせり度が高くなったとみなすことができる。

-
- 従来は言語内の原因を求め、格表示が失われてきたことによって、語順の固定化が起こったとみなされてきた。
 - Allen, Cynthia(1999)*Case marking and reanalysis: Grammatical relations from Old to Early Modern English*. Oxford University Pressの調査によれば、格表示が失われる前にすでに語順の固定化が始まっている。
 - 言語と認知過程との関係では、生成文法のように言語は自立しているという考え方と認知言語学のように密接に関係があるという考え方がある。
 - 言語構造と認知過程の間に相関があるという認知言語学の想定に立てば、言語変化についても認知過程の変化との相関を探る必要がある。

-
- 古英語における属格名詞と主名詞の語順はGNであった。(例: yesterday's paper)
 - ところが、近代初期英語以降N of Gの語順も可能になった。(例: leg of the table)
 - 属格名詞は主名詞を導入する準備的な機能を持つとされる。
 - 古英語ではテンポがゆっくりであったものが、テンポが速くなったとみなすことができる。
 - これも従来は格表示の弱化によって起こったとされている。